

私は今 言語文化をどのようにとらえるか

「文明（文化）の衝突」は避けられないものなのか？

新井 久容

1. はじめに：なぜ私はことばと文化を結びつきたいと思ったのか
2. 文化をどう捉えるか：個人のアイデンティティと集団のアイデンティティ
3. コミュニケーション活動を通しての文化獲得
4. 「実践」におけることばと文化
5. 結論：「衝突」を恐れない「しなやかな個」の獲得支援へ

1. はじめに：なぜ私はことばと文化を結びつきたいと思ったのか

私は少女時代のある出来事がきっかけで、ずっと国際関係（学）を勉強してきた。そして、それを仕事にもした。ところが、ある所から一步も前に進めなくなってしまった。私が取り組んできたテーマは、「ポリティカル・コンディショナリティ（いわゆる対外援助に付随させた、被援助国の政治経済改革のインセンティブとなる条件）」というものであったが、この問題を考える際に問い直しをしなければならないことが二点あった。第一に、人権や民主主義といった欧州起源の価値観の普遍性について。第二に、内政干渉との絡みで現在の国家概念について。そして、ここで私が突き当たったのが、文化という壁であった。文化の違いをどのように越えるのか、という問題であった。

当時の私は、文化を国民国家に付随するものとして捉え、それが国民統合のイデオロギーという側面をもつことを認識しつつも、その枠から抜け出すことはなかった。

文化の価値そのものを問い続けている限り、衝突は避けられない。価値観に優劣を付けることは不可能かつ不毛であるからと、文化の価値については問わないという文化相対主義の立場をとっていた。しかしながら、一見、説得力を持つように思われたこの立場も、突き詰めていくと、文化を保守的で変化しにくいものとして捉え、却って、文化の絶対視という危険を生じさせてしまう。これは、文化を越えた理解の可能性を否定することにもなりかねない。

このような思いを強くしたのは、1993年に雑誌『フォーリン・アフェアーズ』の夏号に掲載された、サミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」が、改めて大々的に日本のマスコミに取り上げられたこと（98年）がきっかけであった。この国際政治学者の書いた論文は、既に発表直後から、イスラム・儒教コネクションと西欧というふたつの文明の対立が避けがたいものである、という趣旨に対して、さまざまな分野で議論されていた。さらに、ハンチントンの文明の定義は文化と置き換えてもよいくらいの混同がみられることも、早くから問題点として指摘されていた。私は、国際関係の衝突をすべて曖昧に定義づけられた文明（文化）の違いに帰すことは無意味であると思った。「違い」は国際関係の出発点であったはずである。これをベースにしつつも共存の可能性を探ることが、国際関係の役割であると考えてきた。それを「乗り越えられない」としてしまったのでは、そこからは何らの解決も見出せないのではないのか、という危機感が私にはあった。それと同時に、個人の異文化理解こそが、文化の違いを乗り越えるキーとなるのであり、個人の異なるものへの対応能力の育成を、国際関係という分野が担えると私は考えてきたのだが、このような考えに基づいて私のやってきたこと（研究・教育）は表面的な異文化理解であって、具体的な状況には対応できないのではないかという挫折感を味わうことになったのである。国際関係の知識を与えるだけでは、個人の当事者意識は芽生えないし、国家、民族、宗教など、集団の枠を越えることはできない。

文化相対主義は、「この文化」と「あの文化」...というように、ある線引きを行っている。それぞれの価値を尊重するように見えて、実は線引きをした上での価値を問わないだけである。引いた線を絶対視することこそがこの考え方の問題であり、線を引いた時点で既に衝突の可能性をはらんでいると言えるだろう。この線はしばしば世界地図上の国境に重ね合わせられる。国家がまず先にあって、国民や国民文化は、その国家の枠組みにおいて創造されるのである。文化相対主義の考え方は、さらに言うならば、衝突しなくても済むような静的な状況にのみ有効であり、ひとたび衝突が想定されるや、価値の面からは優劣がつかないため、力の勝負にもなりかねない。私は、

この線引きの意味自体を相対化することはできないものなのだろうかと自問した。

私は、まず、国家から、あるいは国民から、文化というものを切り離したかった。集団を統合するための手段ではない、また対立の正当化に使われたいような、文化のあり方を考えてみたいと思った。そんな時、ことばと文化を結ぶ試みに出会った。それが、早稲田大学言語文化研究室・細川の「実験」であった。ことばは個人に属するものである。個人の思考そのものである。しかし、ことばは、国民国家の形成過程で国民文化と結びつけられ、国民教育の手段にもされてきた。そのようなことばを、実質的な意味で文化とつなぐ試みが、細川の「実験」であると思った。国民文化からことばを切り離した上で、文化の習得をことばの学習と重ね合わせることができれば、すなわち、ことばの教育によって文化を習得することが可能であるならば、そのことばの教育を通して、事実上の個人の異文化理解のトレーニングがなされるのではないかと考えたのである。

他人から見ると、論理の飛躍のように思われるかもしれないが、以上のような理由から、私はこの日本語教育研究科にきた。そして、実際には、私が考えていた以上に徹底した理論と実践の現場に立ち会うことになった。このレポートは、そんな私がこの三ヶ月間考えてきた、今後の研究のベースとなる部分、いわゆるスタートラインの部分である。今まで取り組んできた国際関係における「大きな文化」の衝突を、ことばの主体である個人という「小さな文化」から取り組もうという、これはひとつのチャレンジである。このレポートでは「文明（文化）の衝突」に対処できるような「個」の獲得の支援という観点から、言語文化というものを捉えてみたいと思う。

まず、文化を個人のアイデンティティの根幹に関わるものとして考え、次に、コミュニケーション活動のプロセスにおいてそのことを確認する。そこから浮かび上がってくるのは、他者とのインターアクションを通じて社会と結ばれる「私」である。最終章では、理論と実践とを結ぶ可能性について検討し、結論：共存のための関係づけを考えることのできる能力＝「衝突」を恐れない「しなやかな個」の獲得支援へとつなげたい。

2．文化をどう捉えるか：個人のアイデンティティと集団のアイデンティティ

「言語文化研究」の授業（正確には、最初に読んだ細川の著書）でまず衝撃を受け

たのは、文化は自分の中にあるという「個の文化」の考え方であった。文化は認識・価値観の産物であるのに、これを取り出して教えることができるのだろうか、というのが私たちに投げかけられた、古くて新しい、大きな問いだったように思う。他者に対して説明するための文化記述、つまり文化論では、流動的な文化の実体を捉えきれない。それは、文化を取り出した上でどのように解釈するかという、他人の解釈にすぎない。しかも、そのような文化が一般論化され、集団としての行動様式・思考様式としてひとくくりにされてしまっている。しかし、文化は個人にしか認識・解釈されないのである。このような細川の「提案」に対して、授業でもメーリングリストでもさまざまな意見が出された。日本語教育の現場でのジレンマがそこに表れていたように思う。

メール上での細川のアドバイスは、文化論を教えるか、教えないか、どちらがいいかを一般論として議論するのではなく、ひとりひとりがこれを教室でどう扱うかを考えることが重要である、ということだった。それぞれが早い段階から、自分の立場の表明を迫られたのである。私は、教室内の活動となると当初はイメージがわからなかったため、「一般化には疑問を投げかけた上で文化論にも利用価値があるのではないか」とする意見に注目してみた。しかし、文化論としての過剰な一般化が集団類型化を生み、自分のつくった型に自分の思考をはめてしまう従来の知識・情報としての文化の教授に変わりのないことが、却ってはっきりしたように思う。

その一方で、授業後の意見交換の場で集団類型化について活発な発言が相次ぎ、その危険性を指摘しつつ、なぜ集団類型化が起こるのかを真剣に考えているクラスメートたちに、私も触発された。まず、「なぜ」だった。なぜ、文化は集団ではなく個人に属するものであるのか、と考える前に、私も、なぜ、文化は個人ではなく集団に属するものと考えられてきたのか、を考えなければならないと思った。

文化の語源をたどっていくと、「人間の成長」を指すことばに行き当たると言われている。「人間が人間である所以は自然的なものに対して獲得されたものの方が優位であること」、これが文化という概念の根拠であったという。文化は人間ひとりひとり（個人）に付随する語であった。ところが、それが国家や民族などの集団にまで延長して考えられるようになり、文化は個人の集団への帰属性を表す語となってしまった。

文化のエッセンスをひとの「ものの見方・考え方」と定義するならば、ものを見て、考えるのは個人であるから、文化の担い手は個人ということになる。文化は個人の価値観をともなう自律的な思考活動である。ひとは思考するのと同時に自己の位置づけ

を行っていると考えれば、文化は人間のアイデンティティに不可欠なものである。これは、個人のアイデンティティの問題に関わるため、これがないと人間としての統一（人格）が保てない。つまり、人間の存在と切っても切れない本質的なものなのではないだろうか。

このように考えると、国家・民族の文化などの集団の文化は、個人のアイデンティティの模倣（擬人化）である。つまり、国家や民族などの統一のため、その集団のアイデンティティを創るために、創られたものである。しかし、これは必要性から創り出された共同幻想と言うこともできるだろうし、多分にイデオロギッシュなものである場合もある。意図的・恣意的に創られうるし、そうであるからこそ本来は変えられるものであるが、システムとして根づいていると考えられている。集団を組織化する必要のない場合は、その集団のアイデンティティなど問題にならない。しかし、組織化が必要な場合は、その集団の存在意義なども含めてアイデンティティに相当するものが重要となる。「文化」という装置がアイデンティフィケーションに使われるのである。集団によって、時代によって、非常に強力な装置を必要とする場合もあるだろう。国民国家の創造という国際環境の中で、明治時代の日本でも、統合のための文化政策として国語教育が施行されていた。日本文化は、日本国家や日本民族を想定して存在する。あとのふたつが、あたかも遠い過去より連続して存在してきたかのようにみなされて。

このように想定された集団の文化が「衝突」するのは、ある意味で当然のことである。それぞれの集団を固めているものが文化なのだから。このような場合は、文化の受容は自らのアイデンティティを侵食するものではなく、つまり、その集団のアイデンティティを脅かすものではなく、既存の文化に適合的とされるものに限られる。この「衝突」を内にはらんだ集団の文化という概念をブレイクするには、それが絶対的ではないという立場、たとえば、たとえ国家の文化を想定しなくても個人が壊れるわけではないとする立場や、ひとりひとりの中にある文化に目を向けていくというのが、ひとつの方向なのではないだろうか。すべては個人に帰されるということである。

3 . コミュニケーション活動を通しての文化獲得

文化は個人の中にある。これが案外しっくりと私の中に入ってくるようになったのは、「言語文化研究」の授業で「コミュニケーション活動における思考と表現との関

係」が取り上げられ、そこから考えたからであった。ともすれば「文化とは何か」という側面からのみ文化を個人に戻そうと考えがちであった私に、全く新しい視点を提供してくれたのが、「ことばとは何か」であった。ことばがあるからこそ、コミュニケーション活動を通して「個の文化」が伝えられると言えるのである。

ひとはことばを他者から学ぶ。他者の表現（＝ことば）を受け取って、自分の中に引き入れ、自分のことばにしている。引き入れたことばによって、ひとは考えているのである。自分の何ものかわからない思いを、引き入れたことばを用いて粹付けしようとする作業が思考であり、言語化＝内言化とも呼ぶことができる。内言とは、この他者からことばを引き入れた結果として蓄積された言語的コードのことを言う。ひとが思考するということは、内言化を図り、同時にその内言を蓄積していくことでもある。

このように抽象的に考えていたことを、あるクラスメートが「引き出し」の出し入れという表現を使って示したこと（張珍華：11/16言語文化論演習 B）から、私もイメージを膨らませることができた。ひとの漠然とした思いを流動的なタネであるとするならば、それを異なるクッキーの鑄型に次々とはめ込んで抜いていく作業が内言化に当たるのではないだろうか。星型があったりハート型があったりする中で、既存の型にはまらなかった部分を再度すくい取ろうとして、また違った鑄型が繰り出される。これが言い換えに当たるのだろう。自分にとっていちばんぴったりする型を探す作業が言語化なのかもしれないと思った。

さて、ひとはこのような内言をまとめながら出したり、出しながらまとめたりする表現活動を行う。これが、話す・書くなどの形となって表れる外言である。「私」の外言を受け取った他者は、「私」と同じようなプロセスを経て、今度は逆に、自分の内言を外言化して「私」に働きかけをすることになるのであるが、このことが、さらに「私」の内言を刺激し、「私」の思考を促進していく。ひとは生涯、いろいろな他者からの働きかけによって内言を刺激され続け、言語を獲得していくことになる。それは同時に、「私」の思考が蓄積されていくことでもあるし、「私」という自己が形成されていく過程でもある。

私が、他者を媒介として、つまりコミュニケーション活動を通して、現実の世界と関係していることを再認識したのも、この授業によってであった。言語を学ぶのも他者からならば、自己の形成も他者の存在による。つまり、他者が「私」をつくると言えるのだろう。そして、その過程で他者とやりとりされるのが、個人のものの方・考え方、すなわち「個の文化」である。「私」の「個の文化」は、常に他者の「個の

文化」の影響を受け続ける。さらには、ことばを使ったコミュニケーションが図られるのは、さまざまな場面（文脈）においてであることも忘れてはならない。場面とは、「他者との関係づけ」の概念であり、実際のコミュニケーション活動を通して形成されるため、極めて流動的なものである。言語を共有していても、個人によって場面の捉え方が全く違う場合があるのも、その場面を認識できるのが個人しかいないからである。コミュニケーション活動において、ことばとそれが使われる場面とがセットになっている以上、この場面の認識を通して「個の文化」も形成されると言えるのだろう。

授業のメールでもたびたび指摘されたように、個と個のコミュニケーションはそのメカニズムを考えただけでも始めから困難を伴うため、互いのことばを「分かり合える」ということは幻想にすぎないのかもしれない。しかし、それでも、理解し・理解されるためには、さらには自己を位置づけるためには、ことばは重要であり、だからこそ、思考を明確に表現するというトレーニングが必要であることは確かである。

4. 「実践」におけることばと文化

以上のような「コミュニケーション活動を通じた文化の獲得」の理論は、どのように実践されうるのか、果たして実践が可能なのか、ということが、メール上でもテーマとなったし、授業でも取り上げられた。もしかしたら、これが皆のいちばんの関心事だったのかもしれない。私は、「言語文化研究」と平行して「日本事情実践教育」という講座を履修したため、その現場に立ち会うことができたと思っている。そこで、私の自己実現が個人のオリジナリティ（固有性）という形で提出されるのを目の当たりにするとともに、私が最終的な目標としている「しなやかな個」の獲得支援を、日本語教育で実践できるという希望をつないだのである。

私たちの実習クラス「総合5」の授業の目的は、内言と外言の往還関係の活性化、すなわち言語能力の育成である、と細川は明確に言う。そのため、「私をくぐらせる」、つまりテーマを自分の問題として考えなければならない。具体的には、テーマと自分との関係を語ることによって問題を自分に引き寄せて考えていく。その過程が最終的にレポートという形に集約されるのである。自分自身の考えていることを、他者とのインターアクションを通していかに形にしていくかが、一本の柱となっている。

春学期に行われた同じ「総合5」の授業のレポート集『私を探してあと五センチ』

が事前に配布されたが、これを初めて読んだ時の感動は忘れられない。日本語を学んでいる留学生たちは実にさまざまなことを考えている。そして、それを表現しようとしている。もちろん、文法的な誤りが残っている文章もある。しかし、それでもなお、伝わってくるものがあった。そこには、それぞれの「私」がいたのである。彼らのオリジナリティはどこから生まれたのか、それが、私の最初の問いであった。

私が注目したのは、コミュニケーション活動を重ねることによって、学習者が変わっていくことである。個々の変容過程が窺えるレポートほど、私にとってはおもしろいレポートに仕上がっていた。これは、自分自身との対話をしつつ、他者との対話、つまり自分と同じ言語ルールを共有しない者との対話を通して、自分の思考を深めることができた結果なのではないか。個人のオリジナリティにも、この他者とのインターアクションがかかわってくるのではないかと考えたのである。

私の行き着いた仮説が、「オリジナリティの獲得には自己認識の明確化のプロセスが不可欠である」であった。受講者たちが、自分で設定したテーマの中に自らを投げ込み、もがいて考えた末に紡ぎ出したことばは、「自分のことば」の獲得と同時に自己認識の明確化（自己の獲得）という意味を持つ。自分の考えていることを明確につかむということは、今まで見えていなかった自分が見えるということであり、それは「自分のことば」=オリジナリティとなって表現される。

授業記録や受講者のレポートの変遷をたどっていくと、必ず、切れ切れの単語が次第にまとまって形を成していくプロセスを見て取ることができる。これはまた、曖昧であったテーマがインターアクションを通して、より具体化・明確（的確）化されていくプロセスと見ることもできる。自分のテーマを考えていく上で、クラスの内外で発言せざるをえない状況に追い込まれた受講者が、他者に自分のことばを理解して欲しい、他者のことばを理解したいと思い、インターアクションを続ける。その場でやりとりされるのが、それぞれの「ものの見方・考え方」であり、それぞれの「個の文化」である。この過程において、自らの思い込みや偏見などは、自分でそうしようと意識しなくても、露（あらわ）にされて相対化を迫られる。全く別の「個の文化」に出会い、自己が揺さぶられ続けるのである。もちろん、そのために、テーマを自分のこととして捉え、自分の立場を明らかにしなければならないのである。自分の背負った集団類型という文化をはがす、文化学習という意味合いが、この「総合5」の授業には重ねられている。

先に「自己の獲得」と言ったが、私は全く別の自己が現われると考えているわけではない。今まで認識していた自己の上に、また新たな認識が加わるということである。

これは潜在的な自己がまだ存在しているという可能性を意味しており、ひとは永遠に新たな自己を獲得し続ける。つかんだと思っても、実は全部をつかみきれてはいないし、つかんだ瞬間にそれはもう別のものになっていることもあるだろう。新たな環境に対応できる能力というのも、この新たに自己を獲得できる能力を言うのかもしれないと、この授業で私は思った。

5 . 結論：「衝突」を恐れない「しなやかな個」の獲得支援へ

集団の文化を軸にした文化相対主義の考え方は、他者を尊重しているように見えて、実は、自分と他者とを関係づけて考えていないだけである。言語教育もこれをベースに進めていくと、文化として取り出したものを紹介するという、知識の教授にとどまらざるをえない。仮に、その一般化された知識を頭に入れたとしても、「違い」を自分と関係づけて考えるようにはならず、その知識が蓄積されていくにしたがって、硬直した集団類型化が進むこともある。そこからは、何も生まれなければ、反対に、偏見や恐怖など、相互理解の障害のみが増殖する恐れがあり、それを修正するインターアクションへと向かわせるインセンティブさえも失われてしまう。

さらに、創られた集団の文化では「衝突」は避けられない。しかし、集団の文化でなく「個の文化」を想定しても「衝突」は起こる。それは同じである。ただし、国家など集団レベルでの衝突の回避という意味では、「個の文化」は有効であると思う。では、個人のレベルで衝突を回避すれば、対峙している問題の根本的な解決になるのかというと、そうではないだろう。重要なのは、その「衝突」をどのように捉えるか、ではないだろうか。

「違い」が存在するからといって、「違い」に触れないということでは、永遠に共存にはつながらない。それは、並存しているだけである。ひとが共存するためには、ある意味で「衝突」は避けられない。衝突をした上で、それぞれの枠が変わることこそ、他者への理解につながる。そしてこれは、具体的なコミュニケーション活動を通して実現可能なのである。私は、コミュニケーション活動を通じた他者理解ということ、まさにこのクラスでのコミュニケーション活動を通じて学んだように思う。特に、「他者を認識するためには、自分が必要である。結局自分が何なのかということになる」という、あるクラスメートからのメール（田中奈央：11/13言語文化研究）は

示唆に富んでいた。

理解するという事は、自分を相手に近づけているのではなく、逆に相手を自分に近づけているに過ぎない。結局自分は、自分の枠から出られないのである。ただし、人間の可能性として、自分の枠を変化させることはできる。これは、全く新しい自分をつくるのではなく、自分の気づかなかった自分を新たに認識して、自分の幅を広げていくことである。このことは、先の「実践におけることばと文化」のところで記述した通りである。

コミュニケーション活動を通して「違い」に、より具体的に言うと異なる「個の文化」に接することによって、ひとは揺さぶられ変容する可能性がある。しかし、そのためには、「違い」を「違い」として他者を認識する必要がある。その大前提が自己である。基本的に、自己をもたないひとはいないわけであるから、その自己をどのように表現するのか、表現できるのかによって、インターアクションを通して変わるかわ変わらないかが分かれるのであろう。鶏と卵のような関係であるが、自己が変わるためにはインターアクションをしなければならないし、インターアクションをするためには、自己を明確にしなければならない。コミュニケーション活動を軸に他者への理解が深まるというのは、実は、新たに自分で自分を認識できるかどうかにかかっているということなのだろう。

このような「衝突」を恐れない「しなやかな個」の獲得をめざすことは、何も言語教育の分野だけで目標となりうるものではないだろう。しかし、コミュニケーション活動を軸とした言語教育においての実践が、実は最も具体的に目標に手の届くところにあるのではないかと、私は考えている。このことは、本稿で検討してきた通りである。

ゆえに、私は今、言語文化を、「衝突」を恐れない「しなやかな個」（細川は「強固で柔軟な自己アイデンティティ」と表現している）の獲得を支援するためのものであると捉えている。これは、従来の考え方のように、集団の文化の核としてことばを捉えるものではない。言語と文化を切り離して捉えるのではなく、このふたつを不可分のものとして捉えるのである。この場合の文化とは、個人の認識・価値観の産物であり、細川曰く「個の文化」を指す。文化は他者とのコミュニケーション活動を通して伝えられる。私たちは他者とのコミュニケーション活動を通して社会を体験し、他者の「個の文化」を体得する。それが「私」の「個の文化」の形成に影響することは言うまでもなく、また、それを自己の可能性の拡大にも重ね合わせることができるのである。

私は、言語文化活動としての日本語教育は実現可能であると考え、その実践の第一歩を踏み出したいと思っている。

<参考文献>

麻生建「<差異>と<共存>」蓮實重彦・山内昌之『文明の衝突か、共存か』東大出版会，1995年。

ブルーム，アラン『アメリカン・マインドの終焉』みすず書店，1988年。

細川英雄『日本語教育と日本事情』明石書店，1999年。

Kramersch, Claire, *Context and Culture in Language Teaching*, Oxford Univ. Press, 1993.

イ・ヨンスク『国語という思想』岩波書店，1996年。

岡村真佐子『開発と文化』岩波書店，1996年。

ヴィゴツキー，レフ・セミョノヴィッチ『思考と言語』（新訳版）新読書社，2001年。